

木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
今回は木曾川が形成したデルタ地帯、
立田村から、その歴史や現在の
防災体制づくりを中心に紹介します。
歴史ドキュメントでは、輪中の信仰第二編を特集します。



海部郡立田村

ふるさとの街・探訪記

大地の恵み・人・創造 立田村

エリア・レポート

安全で快適な環境づくりを目指して

気ままにJOURNEY

秋晴れの休日。 立田の史蹟を訪ねてみよう。

歴史ドキュメント

洪水を鎮めるために...。
水神信仰は輪中の人々の真摯な祈り。

TALK&TALK

輪中地域の外水災害とその住民対応
大垣輪中を中心に

民話の小箱

白竜の昇天





大地の恵み・人・創造 立田村

立田村は木曾川によって形成されたデルタ地帯。中世の頃から小輪中の開発が始められ、近世には複合輪中に、明治に入り三川分流を目指した木曾三川下流改修が実施されますが、濃尾震災や鶴多須切れのような災害により、さまざまな問題も発生。移住という大きな犠牲を払いながらも、現在は新しい農業地帯に成長を遂げています。

ふるさとの街・探訪記

立田村のあらまし

立田村はかつての輪中地帯です。村のほぼ全域が木曾三川、とりわけ木曾川によって形成されたデルタ地帯で、起伏の乏しいゆるな海抜0m地帯です。村域は東西約3km、南北約9km、細長い帯状となっており、全面積の三〇％が河川敷となっています。村内にはかつての立田輪中内の排水路として機能していた鵜戸川と木曾川の旧河道の一つであった佐屋川(現在の海部幹線水路)が南流しています。

立田輪中地区と福原地区は明治二〇年(一八八七)から実施された三川分流



立田村空撮

安藤萬壽男氏原図により作図

工事により、木曾川をはさんで二分されましたが、昭和五九年(一九八四)の立田大橋の完成によって結ばれました。農業主体の純農村で、立田レンコンは代表的な農産物です。

石田古墳と葛木の渡し

立田村内で最も古いとされる考古遺物は、早尾集落で発見されたS字甕の破片です。これは三世紀中旬のものと考えられ、同様の土器は佐織町や津島市からも発見されていることから、この頃にはすでに人々が移住、定着していることがほぼ確実となりました。

昔の石田村にある石神社は本来大石尊(仁賢天皇)を祭った神社ですが、近年の研究により古墳であると推定、当時の海岸線や古墳文化の波及を見つうえて貴重な遺跡となっています。宮地集落にある宗玄坊廃寺遺跡は、出土した遺跡から七世紀後半と考証されていますが、東海地方における古代寺院が海岸線や河川沿いに集中していることから、参拝する人々の交通に舟が使われ



たことを物語っています。葛木の里については、古事記や、日本書紀に、崇神天皇の后であった葛木高名姫命の出身地であったと記されており、この後の名が地名となったようです。この地は伊勢からの渡海船の着く湊で、葛木の渡しと称さ



宗玄坊廃寺跡から出土した軒丸瓦

ふるさとの街・探訪記



小木江城跡

この寺領を巡ってたびたび紛争が起きましたが、東寺はそのたびに朝廷へ訴え東寺領と認められています。

平治の乱（一一五九）では平家に敗れ

延暦二〇年（八〇二）、伊勢神宮の分身として、北伊勢地方の中心的神宮であった多度神宮、その神宮寺としての法雲寺が、海部郡に墾田や荒地、葦原を寺領として持つっており、その一部が開墾されて大成荘となりました。法雲寺は立田村にも墾田や開発可能な葦原をもっていました。堤防の修理等その維持管理の困難さから京都の東寺へこれを寄進しその末寺となり



ねじ柳跡の碑

戦乱に巻き込まれた中世から近世

れたのは、千余年の昔のこととの記載もあり、伊勢との海上交通路の中継地点であったことがうかがわれます。

た源義朝がこの地に立ち寄りたとき、ねじ柳の古事が残されています。時代は下り戦国時代になると、織田氏の砦として小木江城が築かれました。この頃、庶民の圧倒的な支持を得ていたのが浄土真宗（一向宗）。立田村にも直参門徒があり、長島一向一揆（一五七四）の折には彼らが率いる一揆勢に攻められ、小木江城は落城。しかし、圧倒的な信長軍により一揆は鎮圧されました。

尾張藩藩主と立田輪中

立田村の開発は中世から馬蹄形の堤防（尻無堤）を築くようになり、小輪中が形成されました。氾濫源平野における海水遡上に伴う塩害から水稲を守る塩堤の築堤工事が実施されるようになったのもこの頃です。

輪中形成初期は上流の北部に堅固な堤防を築いていましたが、南方は開けっ放し。洪水ともなれば南方の下流から濁水が入り込み、しばしば水没しました。この状況を見た義直は、輪中の末端に杖（水門）をいくつか造って排水を排除することを命じました。俗に「十二の腹の杖」と呼ばれる水門です。そして東の端には桜を、西端には楓を植えました。西の楓は早く枯れてしまいました。東の桜は専随寺の境内に「赤芽の桜」として現在も残されています。

濃尾地震と復旧工事

明治に入ると市制町村制施行と合併により、明治三九年（一九〇六）立田村が誕生しました。

明治二〇年（一八八七）には三川分流を目指した木曾三川下流改修（明治改修）が実施され、改修には立田輪中の西側を開削して木曾川を通すという計画で、明治二年になると土地の収用も進められました。

しかし明治二四年（一〇月二八日）根尾谷断層を震源とする「濃尾地震」が発生。内陸型地震としては世界最大級の歴史的震災で、死者は約七千名でした。



立田輪中では木曾川堤で一六km、佐屋川堤で一四kmにわたって各所に亀裂や陥落が生じ、その被害は愛知県内でも最大級。船頭平杖樋もほとんど壊滅に近い破壊を受けました。村の古老の話によれば、堤防上にできた割れ目が六〇cmほどの口を開けたり閉じたりし、今に底に落ちるのではないかと、身は震え足は立たなかったという状況でした。



濃尾地震直後の根尾谷断層

三川分流と移住

震災復旧工事が終わり、いよいよ改修工事が再開し、立田輪中内の開削工事が並行して進められることになりましたが、この時期まだ住居等の移転がほとんど行われていない状況でした。予定では第一期末の明治一九年までに、立田輪中の浚渫及び築堤工事をすべて終了することになっていますが、濃尾地震の発生や、その後の人夫賃の高騰などが重なって大幅に遅れていたのです。

改修に伴う移住や家屋等の移転は、一部の富裕層を除いてほとんどは明治二五年頃から順次移転作業に入っています。

移住や家屋移転は次のように分類されます。

ア 各自に自分の意志で移住した者
村内、もしくは近隣町村へ移住し、農業を営んだ者

大都市へ移住し、農業をやめて職業を変えた者

縁故を頼りに各地へ散り散りに移住した者

イ 集団で移住した者
神野新田(愛知県)

棕本(三重県)

今金町(北海道)等

アの人々の苦勞も並大抵ではありませんでした。少なくとも自分の意志で移住後の職業も土地も選択できました。しかし土地も金もなく移住してい

った人々の苦勞は、想像を絶するものがあります。

一方、寺院の移転にも同様のあるいはそれ以上の苦勞がありました。当時は一村につき一寺院がありほとんどの村民が檀家でした。寺院を含め全村移転をした村、一部が改修に係って当該者だけが移転をした村、その度合いによてさまざまな状況が現出。寺院にとっても全村が水没した村です。檀家が四散してしまつた寺はほとんど入移ればよいのか。苦しい選択を迫られました。村の一部が残つた寺は、だいたいその残つた土地へ移転しています。しかし、檀家の数はこの時点から急激に減つてしまつています。全部であれ一部であれ、移住していく檀家を抱えた寺院の苦勞は察するに余りあります。国はその事情を汲み取つたのか、各寺院へは一般の住民とは別に早い時期に移転費を下付しています。

立田村で移転した家は約七百戸。廃川となる佐屋川の川原が、収用された土地の替え地として与えられるという話もあり、それに希望をつないだ人々は、福原の北の中堤として残された法面の松林の中に小屋を建



北海道移住について話し合った文書

て、工事の日雇い人夫をして、その日を待ちました。また、移住先のあてがなく途方にくれた人たちに、厚意の手を差し伸べた



現在の船頭平開門

のが福原輪中を開発した名門加藤家でした。福原新田堤外にある加藤家の地を、しばらく提供。その後、立田輪中の改修工事が終了する頃、各地へ散っていました。

こつした犠牲を払いながらも、明治三〇年、立田輪中の木曾川左岸地先の築堤工事は完成しました。

また、三里の渡しとして河川交通の一翼を担っていた佐屋川は、河床に土砂が堆積し、江戸末期から舟運が不可能になっていたため、締切工事を実施。明治三三年に上流の佐屋川分派点、翌年には下流の木曾川合流点で着工し、明治三四年には完全な廢川となりました。この締切工事により立田村は、現在の津島市や佐屋町などと地続きとなりました。

一方、船頭平開門は明治三五年に完成。この三川分流に伴う導水堤、制水、浚渫、砂防工事等は、明治四四年に完成しています。

新しい農業地帯に成長

三川分流を実現した一大事業により水害は減少しましたが、輪中の低湿地は潮の干満による自然排水だけでは十分に内水排除はできませんでした。昭和五年(一九五〇)には船頭平の杵樋に三五〇馬力の排水機二基を設置、それに並行して今まで掘潰れになっていた田地・川・池などの内水面干拓が進められ、農業構造改善事業による農業の機械化、ライセンサー・苗供給施設などの建設も実施。新しい農業地帯として成長を遂げました。

昭和三四年(一九五九)の伊勢湾台風では、立田・福原地区ともに堤防が欠ける程度で決壊にはいたりませんでした。現在、大地の恵み・人・創造 たつたをまちづくりのテーマに多彩なプロジェクトを実施。高齢者福祉の推進や児童福祉・保育への取組み、生涯学習の推進など、地域の人々が連携して住みよい環境づくりを目指しています。



立田排水機場

参考文献

- 『新編 立田村史』通史編
- 『新編 立田村史』三川分流
- 『新編 立田村史』立田村
- 『新編 立田村史』立田村
- 『角川地名大辞典』愛知県、角川書店
- 『村勢要覧』二〇一〇、平成 四年、立田村
- 『立田村第三次総合計画』二〇一三、二〇二二
- 平成一五年立田村

AREA REPORT

立田村

安全で快適な 環境づくりを目指して

立田村の歴史はまさに水との闘い。明治期に行われた木曾三川下流改修など、大規模な河川改修を基盤に、何度も河川の整備や排水施設の強化が行われ、水害は大幅に減少しています。しかし、天災はいつ何時起きるかわからないもの。立田村では防災体制を強化して、万一の災害に備えるとともに、農業集落排水事業を実施してさらなる農業の飛躍を目指しています。

立田輪中の水害

木曾川と佐屋川に囲まれ、海拔0mの低い土地に築かれた立田輪中は、毎年のように水害に悩まされてきました。

破堤すると、決壊箇所は大きくえぐられて浸がで、田畑や家屋敷は流されました。水害後早速困るのは、一滴の飲み水一粒の食料もなくなってしまうことでした。また、せっかく育ててきた農作物は水にさらかり、この年の収入を失ってしまうことになりました。

さらに、災害復旧という作業も伴います。これまで機能してきた用排水路の機能も麻痺させ、湛水箇所をあちこちから掘り出すことになる土砂を取り除き、水路を新しく整備し、耕地を取り戻す工事という大変な作業が待ち受けていました。

農民は災害のたびに藩へ救出を願い出、一日も早い田畑の復旧に取り組みなければなりません。早尾集落には水害を物語る伊藤家の文書が残されて

いますので、その一端を紹介します

立田輪中の水害記録

- 一 下大牧村破堤
元禄(一六八八〜一七〇三)年中
- 一 船頭平村破堤
宝永(一七〇四〜一〇)年中
- 一 早尾村破堤
享保五年(一七二〇)頃
- 一 赤目村破堤
元文三年(一七三八)頃
- 一 江西村破堤
宝暦五年(一七五五)頃
- 一 立石村破堤
安永八年(一七七九)八月一四日
- 一 大森村破堤
寛政(一七八九〜一八〇〇)年中
- 一 葛木村・松田村破堤
天保一二年(一八四一)五月二三日
- 一 又右衛門新田破堤
嘉永三年(一八五〇)八月一八日
- 一 塩田村破堤
安政四年(一八五七)五月二二日
- 一 船頭平村破堤
慶応二年(一八六六)五月一六日
- 一 雀ヶ森村破堤
明治一〇年(一八七七)四月二八日

天災に備えた防災体制を

伊藤家文書が示すように、立田村の歴史はまさに水との闘いでした。しかし、江戸時代や明治時代に行われてきた河川改修を基盤に、何度も実施された河川の整備や排水設備の充実により、水害に悩まされることは大幅に減少しています。しかし、天災はどのような形で迫ってくるかわかりません。立田村では災害に対して即座に対応できる対策づくりを進めています。

村内の北部と南部には防災コミュニティセンターを設け、災害時の避難場所を確保しました。南北のコミュニティセンターは、児童遊戯室・浴室・休養室のほか、防災倉庫を備えた多目的施設です。日常においては、住民相互の交流の場として活用されています。

村のほぼ中央を南北に流れる鶴戸川には、鶴戸川新橋を架橋しました。この架橋により、主要幹線道路である東西の道路、村道鶴戸川西一号及び村道鶴戸川東三十七号(を結び)、日常生活と通学路

鶴戸川新橋



の利便性を図る一方、洪水及び地震等の予期せぬ自然災害に備え、緊急車両の道路や避難路などの防災道路としての重要な役割を担うため、新設されました。

また、ハザードマップを作成し、各戸に配布すること

によって、住民の防災意識の啓発に努めてきました。立田村洪水ハザードマップは、木曾川が大雨によって増水し、堤防



南部地区防災コミュニティセンター

が決壊した場合の洪水氾濫の解析に基づいて、浸水の範囲とその



浴室 (南部地区防災コミュニティセンター)



休憩室 (南部地区防災コミュニティセンター)

深さ並びに避難場所を示し、住民の避難に役立つように作成したものです。洪水の規模は、木曾川流域に概ね百年に



北部地区防災コミュニティセンター

一回降ると予想される降雨による木曾川の水量を想定しています。

さらに、災害の情報をより早く伝

達する手段として防災行政無線を整備し、平成二六年四月一日から、こつぽつ

たつたを開局させました。この施設は

役場に基地局を設置するとともに、海部

西部消防本部に遠隔制御装置を配備

し、村内の二八箇所の屋外拡声子局装

置に電波を発信して、住民に各種の情報

を知らせるものです。これにより、災害発

生時における地域住民への正確で迅速

な情報伝達が可能になり、防災体制が

一段と強化されることになりました。ま

た、平常時には一般行政広報としての活

用も行えるようになりました。

用も行えるようになりました。

緊急時における地域体制の強化

こつぽつした防災体制をさらに強化する

ために、立田村では第三次総合計画の一

環として緊急時における地域体制の強

化を推進しています。

海抜〇mの立田村では水害や地盤沈

下に対する対策や日頃からの災害発生

時における意識づくりは暮らしの安心

と安全を確保するために重要な課題と

なっています。さらに、東海地震が危惧さ

れている中、水害のみではなく、大震災を

含めた地域体制や住民の生活様式など

の変化に対応した体制など、緊急時にお



立田村洪水ハザードマップ



防災行政無線システム



ける地域体制の再度見直し、強化を図り、大きな被害が発生しないまちを目指していく必要があります。そのため以下の基本方針を中心に、さまざまな計画を進めています。

基本方針

新たな情報通信基盤の活用や住民生活の変化などを加味した防災通報システムや緊急時連絡体制づくり、広域的な応援体制や緊急輸送道路の確保、住民の自主防災体制の充実に努め、災害が発生しにくい地域環境を築く一方、災害や急病などの発生時における住民の適切な行動の定着を目指します。

計画の内容

- 地域体制の強化
- 防災通報システムの整備

- ・ 緊急時連絡体制の見直し
- ・ 海部西部津島消防相互応援協定による消防体制の充実
- ・ 飲料水の安定供給・確保
- ・ 狭あい道路の解消による緊急輸送道路の確保
- ・ 避難路や避難場所の点検・整備及び備蓄品の充実
- ・ 水害対策の推進
- ・ 木曾川堤防補強・高水敷整備など、治水事業の促進
- ・ 水路の整備
- ・ 地震対策の推進
- ・ 公共施設の耐震調査の実施及び結果に基づく整備
- ・ 民間住宅の耐震調査実施への支援
- ・ 住民組織体制の充実
- ・ 分団の統合及び新たな自主防災組織の育成
- ・ 高齢者や障害者など、災害弱者に配慮した支援体制づくり
- ・ 消防施設への維持管理への支援
- ・ 緊急時における初期対応の周知
- ・ 定期的な消防・防災訓練及び救急救命講習会の実施
- ・ 災害マニュアルの周知徹底
- ・ 休日・夜間医療機関の周知

参考文献

- 『新編 立田村史』資料編
- 平成一一年 立田村
- 『村勢要覧二〇〇一』平成一四年 立田村
- 『立田村第三次総合計画二〇〇三二〇一〇』平成一五年 立田村
- 『立田村南部地区「ミニシティ」』立田村
- 『立田村防災行政無線システム』立田村

【農業集落排水事業】

農業のさらなる成長を目指して

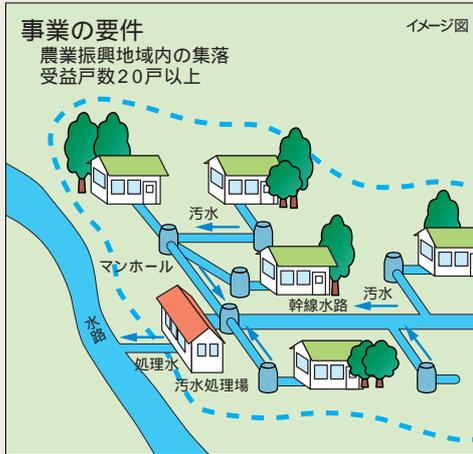
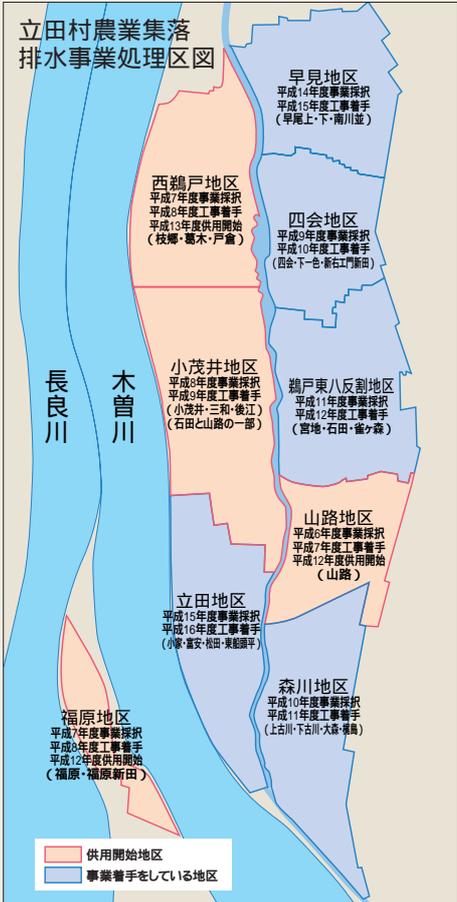
かつて氾濫地域だった立田村は、度重なる河川改修によって豊かな農業地帯に成長を遂げました。しかし、生活様式の高制度化、農業生産様式の変貌など、農業及び農村を取り巻く状況の変化により、農業用の用排水の汚濁が進み、農作物の生育障害、土地改良施設の維持管理費の増大など、農業生産環境及び農村生活環境の両面に大きな問題が生じています。このため、立田村では、平成六年より農業集落排水事業を実施しています。農業集落排水事業は、農業用の用排



真空ステーション
(真空式汚水流送システム)

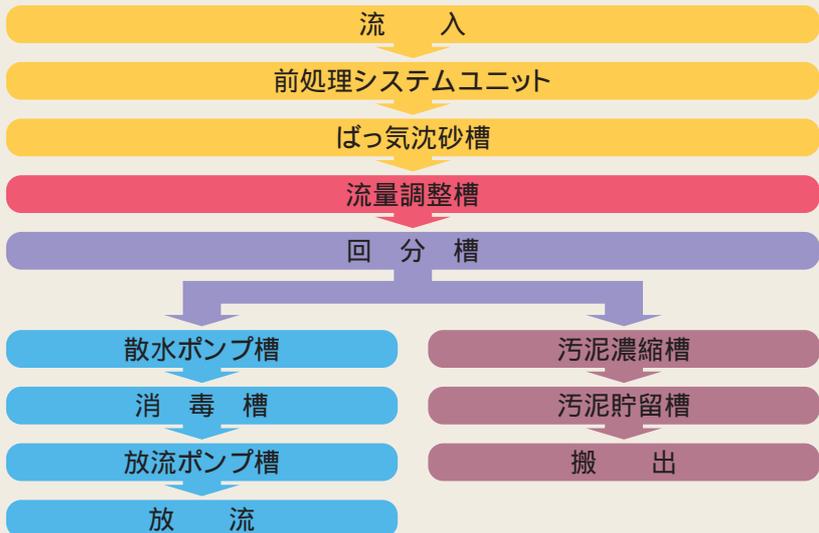


山路処理場



水路、ため池やダムなどの農村を取り巻く環境を向上し、農業の生産が十分におこなえ、農村の生活が快適におくれるようにするために、農村のトイレ、台所、風呂場などの汚水を集めて、これをきれいにする事業です。立田村では村内各地区への排水処理施設の整備と各家庭への接続を進めています。

処理工程の説明



福原処理場



気ままに JOURNEY

立田村

秋晴れの休日。

立田の史蹟を訪ねてみよう。

水鳥はゆくり羽を休め、旅人に乗せた渡し舟は、波を切つて岸へ向かう。木曾川と長良川。日本でも有数の大河に抱かれた立田村は美しい水郷地帯。川に向き合つて、歴史を重ねてきたまちである。そんな史蹟を訪ねてみよう。

美しい水郷地帯

東名阪自動車道の弥富インターから木曾三川公園の展望タワーを目指して約10分。立田村は水と緑が香る町。ススキの穂は川風に揺られ、川面では水鳥も漁船もゆくりと静かな時間を味わ



葛木の渡し

ているよつで。秋の陽射しを浴びてにこやかに微笑む木曾川と長良川。その美しい光景は、まさに一幅の名画です。穏やかな流れは、自然の力と向き合った先人たちの長い歴史を抱いているからこそ、深

い趣をみせているのでしょうか。

美りの季節を迎え、黄金の稲穂が揺れる水郷地帯。豊かな時代を迎えた立田村の歴史を訪ねて、秋の日の散策に出かけてみましょう。

山路の渡し跡と早尾の渡し跡

昔の立田の人々の足は舟。田植えに出かけるのも、お寺へお参りに出かけるのも、自家用の舟、お嫁入りに舟が使われていたそうです。村のほと



舟に乗って嫁入り

んどが農業を営むこの村では、お嫁さんといえども大切な労働力です。家に赤ん坊を残して農作業へ出かけたお嫁さんは、家まで舟で帰り赤ちゃんの世話をしたり、舟の中で子どもを育てたこともあったそうです。

また、木曾川や佐屋川などを越えるために、渡し舟が運行されており、人々

や物資を乗せて川を行き来していたようです。中でも三里の渡しは、尾張藩が佐屋路を創設したことに伴って、開かれたものです。七里の渡しと呼ばれた熱田の宮から桑名への海上七里が、風や波のため困難や危険があったため、東海道の側道として佐屋路を開き、佐屋から桑名へ川で渡る渡船を整備したのです。

佐屋川沿いに約1kmの間隔で渡船場があったよつで、山路の渡しは三里の渡しで有名な佐屋湊と結ぶ渡し場です。佐屋湊は徳川將軍の上洛に備えて開かれた航路です。それだけに華やかなにぎわいを見せ、大小の舟がたくさん出入りしていたよつです。山路の渡しと同様に佐屋川を越える渡し場として、早尾の渡しがありました。二尾張の津島と美濃の高須や今尾、大垣などの西美濃を結ぶ国道級の重要な街道に開かれていました。

早尾の渡しを開いたのは、津島と高須



早尾の渡し跡

を領有していた徳永法印。天正二〇年（一五九二）のことでした。船頭の源六に三七石を与え、渡船が始まったとされています。

今はもう用水路になつた佐屋川ですが、かつては急流の木曾川。舟をこにも特殊な技能が必要で、三里の渡しを大名や將軍が通行される時は、立田の船頭が助郷として加勢していたよつです。ですから源六もきつと風を切り、舟をいでしたのでしよう。

急流を乗り切るためには、舟の船先を斜め上流へ、こつしなないと舟は流されてしまつから、棹をさす位置やこぎ方に微妙な「ツ」があつたよつです。

きつと源六は、当代きつとの船頭。だから、白羽の矢が立つたのでしよう。早尾の渡しには立田輪中唯一の高札場があつたことから見ても、渡し場の重要性がわかります。

今はもう名残もとどめていませんが、早尾の渡し跡にたてば、いなせな船頭の掛け声と街道を行く人々のざわめきが聞こえてくるよつです。

立・田・村・の・歳・時・記

おみよし祭り

津島神社の「みよし流し」にならった神事で、ヨシヤガマで「ほこら」や「みこし」を作り、津島神社からお札を受けてきておまつりし、その後川へ流すという行事です。現在、小茂井と山路の中村で行われています。呼び名は字によって「おみよしさん」「おみこっさん」などといい、行事の中身も少しずつ違ってきています。



ぼんたたき

旧暦7月14日の夜、子供たちが家々をまわって、「はやし唄」を歌いながら地面にしゃがんで庭をたたくという行事です。庭をたたく道具も「ぼんたたき」と呼び、わらを木づちで打って柔らかくしたものに縄を巻き付けて作ったものです。



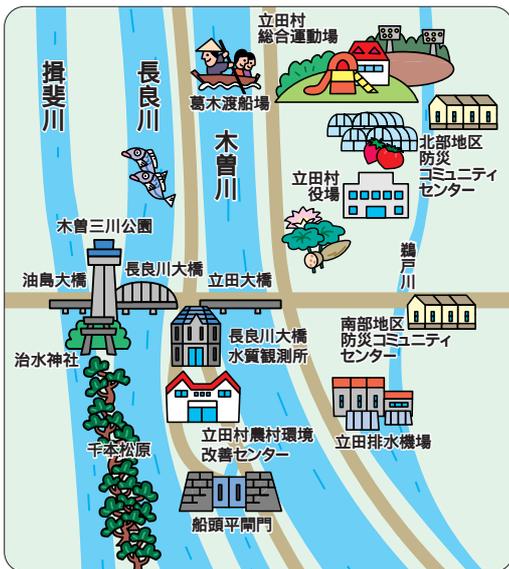
ちょうちんとぼし

農事に関した行事の一つで、田植えが終わりになると農上がりといって、この日は農事を休んで祝う。子供たちは、地藏堂の前で赤いちょうちんを山形に灯し、花火をあげたりもします。



立田村 EVENT INFORMATION

2月	農産物フェア 走ってみよう会 木曾三川公園健康マラソン大会	7月	運見の会
4月	桜まつり 消防団開式 春季文化祭	8月	水郷盆踊り ビーチボールバレー大会 テレーケ記念交流レガッタ
5月	春季文化祭 木曾三川交流レガッタ	9月	村民体育大会
		10月	秋季文化祭
		11月	木曾三川公園リレマラソン



交通のご案内

名古屋方面からお車をご利用の方
名古屋IC 東名阪高速道路 (約40分) 弥富IC 国道155号 (約15分) 立田村

名古屋方面から公共交通機関をご利用の方
名古屋駅 名鉄津島線 (約30分) 津島駅 タクシー (約15分)

お問い合わせ

立田村役場

〒496-0938 愛知県海部郡立田村大字石田字宮東68
TEL 0567-28-7278 http://www.vill.tatsuta.aichi.jp/

宮地の渡し跡と多度道

早尾の渡しが重要な国道だったのから、宮地の渡しは信仰の道。宮地から津島の下新田へ。目的は早尾とは変わりませんが、津島天王社へ参詣する人々の多くが、この渡しを利用していったようです。津島天王社は日本三大川まつりの一つと称される川まつりで有名なところ。それだけに立田の人々の多くが、津島天王社を訪れたことでしょう。現代とはちがって娯楽がとてもしない時代。こうした参詣がとてもしない家族旅行だったのでしょう。祭りの縁日に並ぶおみやげ物やねだる子ども風景が見えてくるようです。

木曾川を越える唯一の渡船として、今も運行されているのが、県営の葛木渡船です。葛木は崇神天皇の後の出身地といわれるところ。伝承によれば、この地は伊勢からの渡海舟が着く湊場で、そのルーツは千年以上昔のこと。葛木の渡しは、葛木地先から木曾川を渡り、右岸の森下地先を結んでいます。明治一〇年代の木曾三川下流改修により、昔の葛木村の半分以上が木曾川の川底へ消えましたが、その後、葛木から背割堤へ渡る県営葛木渡船が開かれました。



葛木の渡し跡の碑

葛木の渡しと葛木渡船

運行時間は年中無休で、日の出から日の入りまで。料金は無料ですから、晴れの休日、渡船に乗って昔の人々の気分を味わってみるのも一興です。

赤芽の白山桜と鈴塚跡

尾張藩藩主徳川義直は、名君といわれた人物です。鷹狩りと称しては、地域を歩き回り、人々の暮らしぶりを見回すといわれています。小鳥や水鳥が多かった立田輪中の水辺や雑木林は鷹狩場として優れていたところ。ここを訪れては、水害に苦しむ人々の声に耳を傾けたと伝えられています。その結果、築造を命じたのは排水用の水門でした。かつての立田輪中の最南端の水門があったところに、義直お手植えの桜の子孫として、赤芽の白山桜が今も美しい花を咲かせています。この桜は伊勢湾台風で倒れましたが、その後根株から出た若芽が成長したものです。

の春ともなれば多くの人が訪れています。また、鈴塚跡も義直の伝承を残すところ。鷹狩りに訪れた折、鷹から落ちた鈴を、土地の人が埋めて塚を作りました。今では塚はありませんが、このことから「スガモリ」の地名が起ったといわれています。こんなエピソードも、殿様と人々の心温まる交流を伝えてくれるもの。歴史をつくり未来を開くのは、やはり人々の力です。立田村の物言わぬ美しい風景は、そんな歴史を物言わず語りかけてくるようです。



義直お手植えの桜の子孫「赤芽の白山桜」。

洪水を鎮めるために…… 水神信仰は輪中の人々の真摯な祈り。

洪水に悩み苦しめられてきた輪中の人々は、古くから治水の神さまとして水神を祀ってきました。それらは堤防の決壊箇所には建てられていることが多く、水防の要所を教えてくれています。今回は大垣輪中の水神信仰を中心に、また雨乞い信仰についても紹介します。

輪中地域の水神信仰

木曾三川下流域に分布する輪中は近世以降の新田開発に伴って拓かれたところ。田を開き周囲に堤防を巡らせるところから輪中と呼ばれるようになった。輪中は南に向かって順次開発されていきますが、その一方水害も多発するようになり、従来遊水地であったところを農地化したことや、河川に人工的な流路を作っていく中で、河川の氾濫とその被害を繰り返すようになり、宝暦治水に代表されるような治水工事も盛んに行われ、また河川が暴れるのを鎮めるように、神へ祈願するようになり、

輪中地帯に水神社は、輪中の人々の願いを象徴したものです。水難除けの神を祀った水神社が各地に点在しています。それらは独立した立派な社殿を持つものもあれば、境内末社として祀られているもの、あるいは石祠だけのものなどいろいろです。水神の祭神も弥都波能売神

とは限らず、一定ではなく、龍神のほか神明社・白髭社・多度社・貴船社などを勧請して、水難除けにお祀りしているところもあります。

またその祭礼は決漬した月日であり、夜半に祭事する水神はその時刻に決漬したのです。近年は祭礼日も祝祭日に変更されつつあります。

【大垣輪中の水神信仰】

大垣輪中とその信仰

大垣輪中はいくつもの小さな輪中で構成される複合輪中です。古宮輪中・木森輪中・伝馬輪中・今村輪中などの小さな輪中の多くは、大垣藩の低湿地の新田開発で排水路の堤防や部分的な堤を造るなかで成立していきました。

信仰について大垣輪中をとりまく環境は、天照大神を祀る伊勢神宮が三重県伊勢市に、天目一箇神を別宮として祀る多度大社が三重県多度町に、頭牛天王を祀る津島神社が愛知県津島市にあります。その信仰圏は広く、大垣輪中にも

深く浸透しています。中でも伊勢神宮と関係する神明神社は大垣市内四三の町（新修大垣市史による）にあり、特に旧大垣輪中の周辺部水田地域に祀られています。これらは伊勢神宮の神領であったかまたは江戸時代初期の開発期に氏神として祀ったのであろうと考えられています。また平野における農耕を反映して御

鍬社も五六町に及んでいます。御鍬社ほか他の神社の境内にあり、一見しただけではわからなくなっています。御鍬社は「神田を耕し始めし鍬」という農機具の名からもわかるように、もともとは豊作を祝い感謝する地域の農耕神でした。

水神社の祭礼

これらの神社の中には水神信仰と結びつき、九月・一〇月に水神さんの祭礼が行われていたところもある。かつて洪水の時期に関係していたと思われる。

たとえば大垣市深池町にある水神の祭礼は九月一七日で、この日は村中で準備、縄に百八個の提灯をつけ、当日は子

ども相撲が行われたといわれています。しかし現在では形式的な祭礼が行われています。

また水神の祭礼のほかに、各戸に水難除御

札を配って、無事を願いました。この水難除御札は洪水の危険の多い揖斐川堤防沿いの集落に集中し、中でも最も危険の多い前田村・瀬古村・曾根村・津村などでは毎年配られ、その他の集落は隔年ごとになっていました。

堤防上の水神と決壊守護神

大垣輪中の水神社は、図のように分布しています。

大垣輪中の東を流れている揖斐川の堤



平田町の水神



防上あるいは中段や下に多く祀られています。これは水防上の危険箇所、ないしはかつての破堤地点など、水防の要所に建てられている場合が多いようです。

大垣市多芸島地内の杭瀬川左岸堤防の上には決壊守護神が祀られています。これは明治二十九年（一九〇六）九月八日午前六時、大きな地響きを上げて堤防が決壊したところ。大垣市は濁流の海と化しました。人々は再び洪水に見舞われ、ないように、決壊地の近くに祠を建て、神に堤防を守ってくれるように祈り続けてきました。祠は当初木造でしたが、昭和三十一年（一九五五）に石碑に建て替えられました。今でも毎年九月八日には町内の人々が集まって、「水神さん」のお祭りをしていきます。碑の後ろに見える建物は「郷倉」と呼ばれる水防倉庫です。水防倉庫と水神は同じようなことに建てられている場合が多く、ともに水防の要所を

示しているといえます。

このほか、相川沿いの十六町、水門川では川口町や世安町、揖斐川沿いでは平町・直江町・三本木町などの堤防上に水神が祀られています。中でも世安町の水神神社は社殿をもつ神社で、史料によれば、多年水害を受けたので、天正十九年（一五九一）村民五名で勧請したといわれています。

平町は近世初頭に開拓された集落で、その昔揖斐川堤防が破堤したため、水神を勧請したようです。水神の祠の隣には常夜灯が立ち、石柱に「水神社」と刻んでいます。直江町と三本木町の水神は木造で、見落としてしまつほど小さな祠です。地元の人々の言い伝えによれば、昔は堤防が切れた場所。三本木町の水神神社は、善北竜王といわれ、俗に童王さまと呼ばれていました。ここは、その近くの田を掘ると砂利が出てきたから、やはり昔

祭りの様子 久瀬川町の水神神社

切れたところだ」との伝承をもつ地点、これらはいずれも決壊した場所に安置してあることを教えてください。

今年七月に福井市の足羽川が破堤し、大きな被害をもたらしたが、その破堤地は「一本木地蔵尊」と称される決壊守護の水神の祀られている地点である。（伊藤安雄注）

十六町の水神も同様で、相川が曲がる危険な場所に祠があります。

こうした水神は、明治以降の河川改修により、変更されたところもあるようです。堤防の中腹に建つ水神は、治水工事により取り残されたもの、また改修工事のため、堤防から離れた神社の境内に、末社として祀られた場合もあるようです。

流れ着いた水神

南瀬川には社殿を持つ水神神社があります。ここは禾森輪中の堤防上にあり、土地はわずかに高く、ほとんど水害を受けることはありませんでした。地元の人々によれば、大水の時、御神体が流れてきて現在の位置に止まったことから、水神として祀られたといわれています。

輪中地域には流れ着いた御神体を水神として祀ることもかなりあるようです。大垣輪中の南方に位置する高瀬町の旧杭瀬川堤防上にある熊野神社も同様です。永正一四年（一五二七）、洪水によって御神体が流れ着いたので、その位置に神社を建て、水難除けの神として祀ったのが始まりです。ここは樹齢三百年を

久瀬川町の水神神社

越すケヤキが生い茂る鎮守の森。一〇月四日には華やかな祭礼が行われていたが、今は神事だけで家庭では赤飯や寿司を作って質素な祭りを行っています。しかし流れ着いたと伝承される水神の多くは、かつての破堤地である場合が多い。

久瀬川町の水神神社は社殿を持つ神社ですが、堤防上にはありません。この水神は、宝暦六年（一七五六）久瀬川の勝沼家が勧請して自宅の守護神としました。久瀬川町一帯には勝沼新田が開かれており、杭瀬川の氾濫に悩まされていた。そこで明治三年（一八七〇）、勝沼家から新田の地所を寄付し、現地（国道一〇号沿い）に移転し、明治九年（一八七六）、本格的な社殿を造営して村の氏神としました。これは水神にしては珍しく、創立年代がはつきりしています。

水神を兼ねる神

により水難除けの神さまを勧請したもので、現在一〇月に祭りを行っています。

桑名郡多度町の多度大社の祭神である天津彦根命は、産業開発の神で農業水産の神として信仰されています。御子神である別宮の天目一箇命と力を言合わせ、雨乞い、河海の安全等にも利益があるとして、農民の信仰を集めていました。前述の多度神社は農業生産に結びつく河川の氾濫を鎮める神として祀られたのです。

このほかにも珍しい水神として、東町の水神があります。この水神は八幡神社の境内にある小さな祠。もともとは龍神さまと呼ばれ、堤防上にありましたが、明治政府の宗教政策により統合され、八幡神社の境内に移されました。ここには社殿はありませんが、キリシタン灯籠があり、今も水神社として信仰されています。

このように輪中地域はその戸数に比べて神社の数が多く特色を持ち、数十戸で一社を奉祀していることが多くありますが、近年、これらの神々を合祀する場合も見られるようです。

本稿の記述については、その多くを西本悦夫氏の著作に拠っています。

参考文献

- 『木曾三川流域史』
- 平成四年 建設省現国土交通省
- 『ふるさと 輪中と大垣 輪中は生きていこう』
- 昭和五二年 大垣市教育委員会
- 『今村輪中郷土誌』
- 昭和五〇年 大垣市南部土地改良記念館
- 『輪中研究』第六号
- 昭和五四年 大垣市教育委員会

雨乞いの神

同じ水の苦しみでも、輪中の人々は時として水不足で苦しまなければならぬ時もありました。田植えの時期になっても雨が降らない時などは、他の地方と同じように雨乞いが行われました。

雨乞いの神として有名なのが、多度大社です。この神について諸説はありますが、元来は地主神であるといわれています。別宮の「目連(いちぢくれん)天目一箇命(あめのみちひと)」は一説に、多度山の三本杉に住む天狗といわれる恐ろしい荒神で、大きな火の玉となって遊行し、時として暴風を起こし、海陸にも災いをもたらす神だといわれています。

神格は風の神ですが、転じて雨の神として名高く、干ばつ時には遠方からも多くの人が雨乞いを願って参拝に訪れます。

かつては御幣をかつき、鉦太鼓をたたき、

「雨タモレ、雨タモレ大明神、サア降レサア降レ、雨タモレ大明神」

と雨乞いの歌を唱えながら、祈願のため参拝する風習もあつたようです。

岐阜県輪中内町の白髭神社の雨乞いは、氏子の代表三人が多度神社に御幣をもらいにいくことから始まりました。御幣は白幣・黒幣・銀幣・金幣とあるので、そのいずれかをもらい受けてきます。帰りの道中は途中で止まると、止まった場所で雨が降ってしまい村落には降らないといわれていたので、渡船の中でも歩いていなければなりません。受けてきた御幣は白髭神社に飾り、雨が降り出すまで、人々は拝殿にこもって祈りました。雨が降り出すと、裏の中村川に壮年の男たちは飛び込んで身を清め、白髭神社と神明神社にお礼参りをしました。

また、大垣輪中の雨乞いは、揖斐川上流福井県境にある夜叉が池で行われたようです。農民が伝右衛門(夜叉)が池伝説の子孫を名乗る(に)手紙を書いてもら



多度大社

い、紅・白粉など五品を土産に持参し、祈りました。この時必ず「七合ください」とか、六合くださいと、水を一升くださいといえ、それは川に満水を意味しました。満水では洪水の危険を招くので、七合とか六合とかの量を決めたのだといわれています。

参考文献

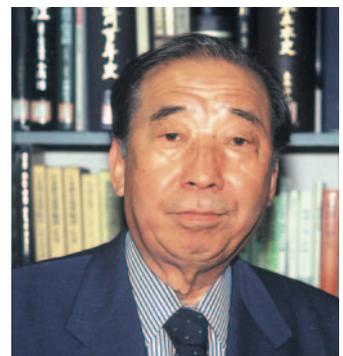
- 『岐阜県輪中地区民俗資料』
- 『桑名市史』 桑名市
- 『輪中内町史』 輪中内町
- 『輪中 その展開と構造』
- 安藤萬壽男編著 古今書院



輪中地域の外水災害とその住民対応

大垣輪中を中心に

花園大学名誉教授 伊藤安男氏



伊藤安男氏

略歴
立命館大学文学部地理学科卒、花園大学名誉教授、立命館大学講師、文学博士、岐阜地理学会会長、岐阜県古地図文化研究会会長、地理科学学会評議員。

主なる著書
『輪中』、『ふるさとの宝物 輪中』、『変容する輪中』、『治水思想の風土』、『地図で読む岐阜』など多数。

明治一九九年大水害と「岐阜水災誌」

明治一九（一八九六）年の七月、九月の水害は輪中地域にとつて最大にして最後の大水害であった。その悲惨さは今も語りつがれ、大垣城の石垣にその浸水水位が、明治一九年大洪水点として刻まれている。平成八年にはこの水害より百年目にあたるため大垣市では、明治一九年大水害一〇〇年記念水害展を催し展示以外にも、輪中と治水をテーマにしてシンポジウムを行い、多くの市民に深い感銘をあたえた。

当時の災害記録として旧岐阜県庁文書の『岐阜水災誌』三編が残されている。この記録によると九月の水害では当時の大垣町の戸数約四一〇〇戸のうち八三%の三三九〇戸が屋根まで達する軒上浸水をつけている。その惨状を「其身辛ウシテ樹ニ攀チ妻子ヲ目前ニ流亡スルモ之ヲ救フニ由ナク死ニ

至ラシムル者アリ或ハ幼児ヲ背ニシ或ハ兄弟相擁シテ死ス者アリ」と記している。

この水災誌は輪中地域の科学的災害誌の嚆矢なすものであるが、浸水区域図などは部分的な破損地を記したものが一葉あるのみでそれ以外は見当たらない。江戸期の水害の浸水区域図は美濃郡代笠松陣屋堤方役所の史料のなかに大垣ながら数多くみられるのに、どこかで散逸したのであろうか。そういうときに古書即売会にて「明治一九年七月岐阜県水害概況図」の原図が売り出されたので、高須輪中の岐阜県海津町歴史民俗資料館に交渉して購入したものが、本論の中心となる浸水区域図である。

「明治一九年七月岐阜県水害概況図」（以下、水害概況図とす）はおおそらく県関係の機関で作製されたものであり精緻なものである。縦一〇五cm、横八〇cmの手書きで6色に彩色されて



明治29年7月岐阜県水害概況図（海津町歴史民俗資料館蔵）

いる。凡例に浸水（茶色）、滞水（灰色、筆者注、内水）、乙濤（赤色）、切所（赤色の丸印）の他、河川、山、堤防などが色分けされている。

し、江戸期の慶安三（一六五〇）年の寅水の大水や、文化二（一八一五）年の洪水時の「岐卓ヨリ養老マテ干上リタル地ナク直ニ船ニテ通行スルヲ得タリ」と酷似する浸水状況であ

る。ただ岐阜市の加納輪中、安八郡の森部、牧輪中の三輪中のみ渚水の内水氾濫区域となっており、他はすべて破堤入水による外水氾濫区域となっている。破堤をまぬがれた三つの輪中も内水により浸水しており、水災誌に「...僅力二堤防ノ破潰ヲ免レシハ加納 森部 牧ノ三輪中アリシノミ然レトモ尚滞水ノ為メ浸水地同様ノ被害ハ免ル能ハザリシ」と記している。

当時の気象状況を水災誌にみると「...一八日(七月)三三・三三ミリ 二〇日二五七・一ミリ 二二日三三・四ミリ」とあり、一八日より二三日までの総降水量四六一・一mmを記録している。この気象に岐阜観測所は二十日に警報を発している。警戒体制のなか大垣輪中では七月二

一日夕刻より各輪中が破堤していく。「廿一日午後六時頃損斐川通今福村堤塘凡百一間決潰シ大垣輪中二入水」さらに同日午後七時三〇分に「...大垣輪中内、小堤八今村輪中二六ヶ所、中ノ江東輪中二廿ヶ所、中ノ江輪中二十一ヶ所、禾ノ森組合二十九ヶ所決潰シ其他ノ小堤決潰ノ箇所頗ル多シ」とあり、記録上だけで大垣輪中では六八箇所破堤している。この時の浸水状況について「...就中大垣ノ

如キハ浸水屋背ニ及ヒ居所ニ困シム者多シ一時難ヲ天守閣ニ避ケシメタリ」とある。

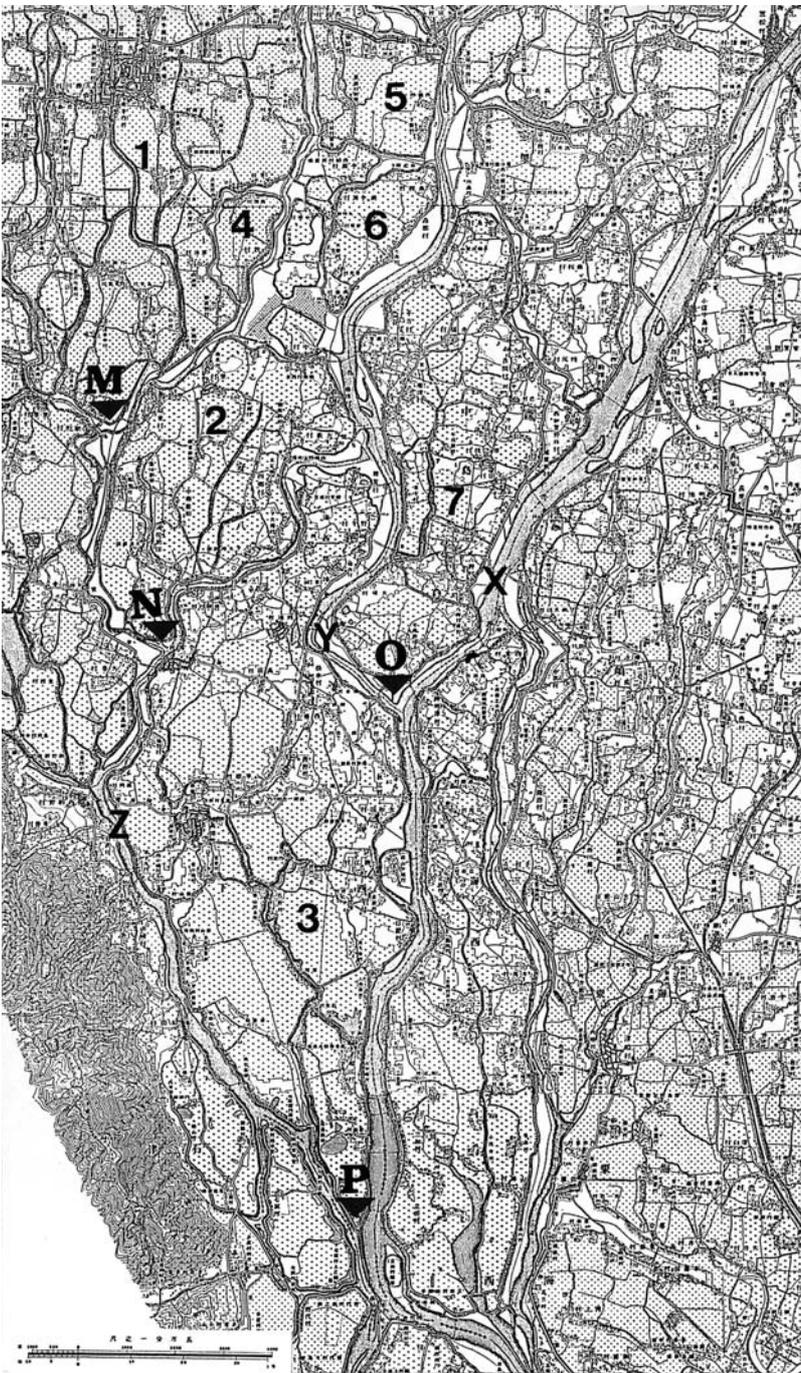
作為的破堤と乙漣

水害概況図の凡例に「乙漣(おとみよ、おとみよ)が記されている。漣(みよ)は漣標、漣筋のミオであり日本国語大辞典(小学館刊)第九巻によると「みよ」漣 水脈 水尾(水緒の意)海や川の中で水の流れる筋」とある。しかし輪中地域ではミヨと称し破

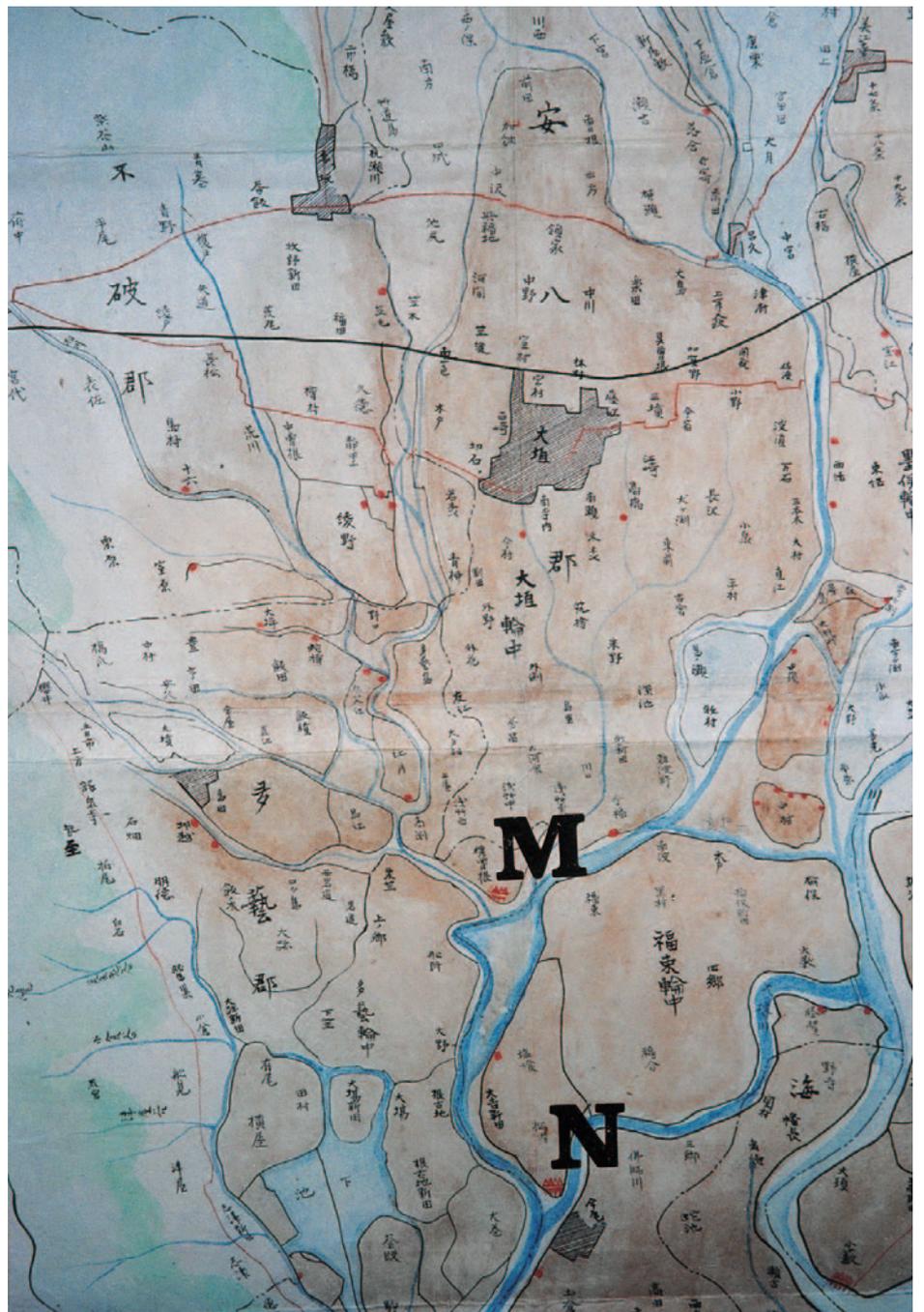
堤地、切所の意で用いられている。例えは江戸期の濃州旬行記の安八郡大森村の項に「...此に地三ヶ所あり、是は皆先年切所の水用とみえたり」とあり「みよ」とルビをふって破堤地としている。また前述の日本国語大辞典の「みよ」の項に美濃 尾張 伊勢の方言として「大水の時に堤を切った水で土が掘れて深くなり埋まらない所」として破堤地切所および切所地の押堀まで含めた意としている。

漣の解釈はできたとして乙漣をどう考えるか、水防関係の人々はオトミヨ

と呼んでいる。水災誌には「昨三日(筆者注、明治二九年七月)午前四時ヲ期シ切開キタル横曽根村(図M参照)、乙漣ハ水噴キ宣シ 水門川開門毛既ニ開扉シテ排水ス」とある。また水災誌に添付されている一枚だけの災害図「岐阜県安八郡入水地図」の横曽根村に「堤防乙漣切所」としている。さらに岐阜県史に「七月三日午前一時頃(筆者注 水災誌と時間が異なる)より乙漣切りに着手、午前四時より排水始ヨリ正午ニ完了」とある。その他「乙漣切割ヲ断行」とか



明治29年7月水害の乙漣分布図
 ...乙漣、M...横曽根、N...松内、O...小藪、P...油島、X...木曾川、Y...長良川、Z...損斐川、
 1...大垣輪中、2...福束輪中、3...高須輪中、4...牧輪中、5...墨俣輪中、6...森部輪中、7...桑原輪中
 明治22年測図1：50,000を1/5に縮小
 (伊藤安男原図)



乙漕箇所を示す記号 M...大垣輪中横曽根、N...福束輪中松内

「乙漕切り」などがみえている。しかし乙漕によって排水処理する慣行は明治期に始ったものでなく江戸期にすでに行なわれていた。例えば文化二二(一八二五)年の水害史料に「大垣町亦入水家屋概シテ床上水深四、五尺アリ、曾根切漕留直二着手スト難毛翌年二月二至リテ落成ス」とある。また明治の横曽根の乙漕は治水の恩人といわれた金森吉次郎が身命をか

けて断行したと伝承されているが、それは亡き父親金四郎の「横曽根権現下切割の事」なる遺命によるとされており、江戸期よりの慣行であることを傍証している。このように乙漕は破堤入水の水害時に、輪中の低位部の南端で輪中堤を切り開いて堤内の悪水を排水する一手段である。排水機出現以前の輪中災害は悲惨であるとともに、外水対策として

完全囲堤の懸廻堤を補強するといかに内水の悪水排水するかという開発の矛盾に直面することとなる。明治二九年の大水害に金森吉次郎が横曽根で乙漕切りを断行したことは広く知られていることであるが、この水害概況図をみると大垣輪中の横曽根以外に、地形図の乙漕分布図にみられるように、桑原輪中南端の小敷(記号O)(福束輪中の松内(記号N)高須輪

中の油島(記号P)などに乙漕の印がみられるのは新しい知見である。ただ乙漕切りの場合、低位部の輪中(下郷)との対立の生ずることは必定であり、経済的補償として納得金約定などがなされるのが一般的である。

なお乙漕以外の破堤地の記号と文化二二年の「濃州勢州川通堤切所絵図」のそれと比較してみると、同一箇所が破堤を繰返していることが知られる。具体的には文化二二年の破堤他の多くは明治二九年に再び破堤していることが知られる。それらを列記すると、勝賀二箇所(高須輪中)今福(大垣輪中)十六(十六輪中)塩喰(福束輪中)綾野(綾里輪中)押越(岩道輪中)中村(中村輪中)孤穴(正木輪中)竹鼻(桑原輪中)河渡(河渡輪中)生津(河渡輪中)など十二箇所の多くを数えている。

数限りなく破堤を繰返すことは、輪中住民にとっては悲惨そのものである。この哀しい願いに託す精神的風土が水神信仰となっていく。

なお本論の史料、「岐阜県水災誌—大垣町安八郡編」および「水害概況図」の復刻版は大垣市文化振興課 大垣市輪中館にて頒布している。

参考文献

- 牧野鐵五郎『大垣地方洪水年度備考』P6 吉安慶介刊 明治二二年
- 岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』P102 昭和六一年
- 『往昔以来木曾川流域洪水年月被害状況』岐阜水災誌 明治二九年稿本

民話の小箱

白竜の昇天 海部郡立田村

立田村のほぼ真ん中、鶴戸川近くの小茂井といつ集落に

「竜池」と呼ばれる池がありました。

竜池は朝日が昇るとキラキラと輝き

夜は月を映し出しても幻想的に光ります。

自分の姿を池に映すと

まわりの景色もくっきりと池に映り出たので

それはそれは美しい池でした。

しかしそれから、竜池で溺れると一度と浮かんでないだとか

「でもきれいな池なのに底が見えないのはおかしい」と噂になり、

竜池は底まで池だと現われられるようになりました。

昭和の初めのころです。

木曾川の改修工事で砂がたぐさん出るようになって

新しい土地を田んぼにするため、

村人たちは砂で池を埋めてしまおうとしました。

ところが工事が始まって七日が経ちましたが、

ちっとも池は埋まりません。

人々は不思議に思い、お坊さんに相談しました。

するとお坊さんはこういきました。

「その池には昔から白竜が住んでおる。

今すぐ池のそばに竜を祭った社を建てなさい。」

それを聞いた村人たちは社を建て、「白竜社」と多付けました。

入神式の日のことです。

朝早くに村人たちが集まるので、ちかみちの晴天はくもりやら

西の方がにわか曇りはじめ

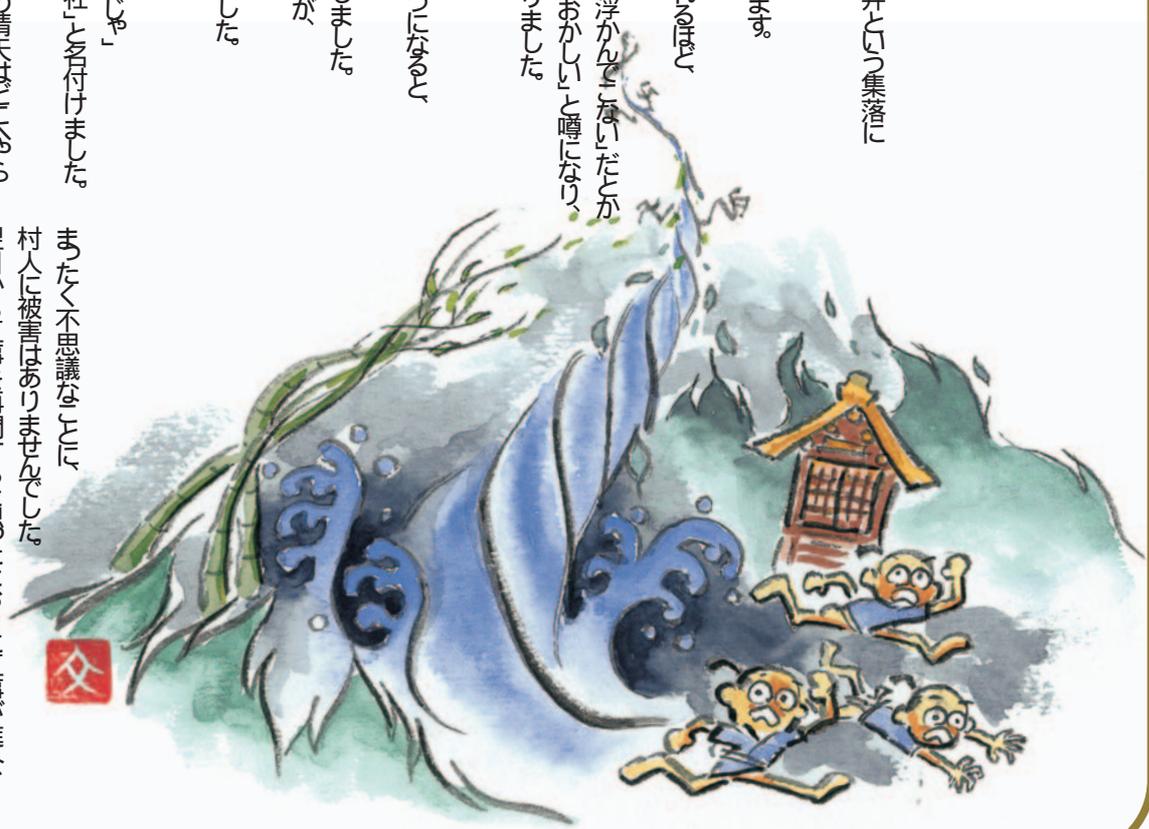
ものすい突風が吹き荒れました。

突風はしつとまに竜巻に変わり、鐘は引きちぎられ

竹が縄のようにもしれ、木も草も飛ばはれてしまっていました。

村人が恐怖におびえた次の瞬間、

暴風雨は去り、もとの晴天に戻っていました。



当時の村人たちは

白竜のためこわすかに池を残すことになりました。

池の縁に建立された白竜社は今も残っており、

そこでは毎年お祭りが行われています。

またぐ不思議なことが、

村人に被害はありませんでした。

翌日から工事を再開すると思いたおり、工事が進み

村人たちは、白竜様のおかげだと口々に言いました。

木曾川文庫利用案内



- 《開館時間》午前9時～午後4時30分
- 《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
- 《入館料》無料
- 《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曾川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

弊紙では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。
今号の編集にあたって、海部郡立田村の皆様、及び伊藤安男氏にご協力いただきありがとうございました。お礼申し上げます。
今回は、次回は岐阜県柳津町を特集します。ご期待ください。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

表紙写真 上左:石神社 上右:立田村の花(アカハス) 下:木曾・長良川背割堤水制